

## 大学生のアパシー傾向とグループ交流との関連

### An Association with Apathy Tendencies and Group Relation among University Students

鈴木 由美

Yumi Suzuki

#### はじめに

2021年度に文部科学省が公表した学校基本調査によると、大学進学率は54.9%で過去最高になった。短期大学と専門学校を含む高等教育機関への進学率は83.8%で、こちらも過去最高だった。大学進学率が上昇していることについて、文部科学省は、コロナ禍で雇用環境の見通しが不透明なことを理由に、就職から進学を選択した生徒が一定数いること、高等教育への修学支援制度によって学ぶ機会を確保できた生徒がいたことをあげている<sup>1)</sup>。

田中・菅(2007)は入学後まもなく学業への慢性的な無気力や留年などの不適応現象を示す学生は少なくない、多くの大学で対応に苦慮しているとしている。この現象はスチューデント・アパシーと考えられると述べている<sup>2)</sup>。

Walters(1961)によると、学生のアパシーは情緒的な動きの減退した状態、過去の体験や将来への期待を度外視して当面の勉学困難のみにこだわっている状態、絶えざる努力にもかかわらず勉学の効果を上げえない状況であるということが出来る。学生たち自身はこの状況を、肉体のけだるさと知的な無気力を結びつけた無感情の状況あるいは、空虚の状態だと自ら述べている<sup>3)</sup>。笠原(1978)はスチューデント・アパシーについて、単に学業場面を回避するだけでなく、進路喪失、つまり進路決定そのものを回避する全面的な職業未決定をともなう、自己進路決定課題への直面が直接あるいは間接的に関与している。このような特徴から幼児期より進学競争への適応を重視し、本人の主體的な進路決定を軽視する日本の教育システムの問題だと述べている<sup>4)</sup>。下山(1997)は、スチューデント・アパシーは日本の青年期に特有な発達障害であると指摘している。行動面では学業回避等の不適応を示しながら、心理面では適応意識が強く、明確な心理危機を示さない特異な障害であると述べ、行動的混乱を示しつつも現実を回避し、表面的な適応に固執しつづけるスチューデント・アパシーの特異性は、受動的適応を重視する日本独特の青年期発達との関連で検討する必要があると述べ、社会・文化的背景として進学受験体制に偏向した日本特有の教育システムの問題は避けて通れない問題としている<sup>5)</sup>。

スチューデント・アパシーの援助方法として、Walters (1961) は臨床援助のポイントとして受動的攻撃的に巻き込まれないこと<sup>3)</sup>、笠原 (1978) は巻き込まれない適切な距離をとること<sup>4)</sup>。青木 (1989) は家族協力を求める必要があること<sup>6)</sup>、松原 (1990) はスチューデント・アパシー傾向の学生を対象に、来談者中心のカウンセリング、行動療法、診断的カウンセリングなどを試行してみたがあまり効果はなかった。また精神医学の精神療法も功を奏さなかった。そこで独自の生活分析的カウンセリング (Life Analytic Counseling、略称 LAC 法) を開発したと述べている<sup>7)</sup>。LAC 法は具体的な行動の調整を行うものである。下山 (1997) は支援方法として「つなぎモデル」を開発した。スチューデント・アパシーでは、当事者が悩まないことで周囲が悩まされ批判的に反応することでますます当事者が悩まない状況となる悪循環の経路が形成される。この悪循環の回路のコンテクストを変えることが重要である。スチューデント・アパシーの学生にとっては、「悩みを語ることを前提」とする心理療法の構造自体が不安を喚起するものとなり、その結果来談は容易に中断となる。この悪循環の回路の要点は、①人との関係の中で悩めない②悩むより回避という行動を選ぶ、この2点である。そこで「つなぎモデル」では、援助対象を「こころ」の悩みとはせず、当事者がはまっている「関係」とし、関係からの悪循環を脱却する。「つなぎモデル」では援助者は回避行動を認めつつ、他方で回避によって関係が切れてしまわないためのつながりを作っていくというつなぎ役支援モデルを考えている。つなぎ役支援により、認知が変容し、悩めるように変化していくことを目標としている<sup>5)</sup>。支援者のつながりが、家族にとっては学生の甘えの温床と考え、支援者に対して不信任感が募り、関係改善のつなぎ役の機能を果たすことが難しい。そこでスチューデント・アパシー傾向の学生と支援者ではなく、クラスの仲間がつなぎ役にならないかと考えた。青年期における同じ問題をもつ可能性があり、仲間同士なら自己開示をしながらスチューデント・アパシー傾向の学生の回避行動を認め、スチューデント・アパシー傾向の学生の認知が変容するのではないかと考える。この仲間同士がつなぎ役になる支援には、信頼関係が必須である。

本研究では、スチューデント・アパシー傾向の学生をどのように援助したらいいのか、その技法を開発したい。スチューデント・アパシーの援助方法である下山 (1997) の「つなぎモデル」支援<sup>5)</sup>に着目して、仲間同士をつなげるために、信頼が深まる交流を明らかにしたい。その方法として対人関係ゲームを含むグループ交流を行う。

本研究の仮説は以下の3点とする。

- ①アパシー性格尺度得点は、グループ交流 (6回) の実施前より実施後の得点が減少する。
- ②アパシー性格尺度得点がグループ交流で変化しない学生は、アパシー傾向 (同一性の拡散) 尺度の得点が高い。
- ③グループ交流でメンバーを「信頼できると感じる」と回答した学生は、グループ交流の前後でアパシー性格尺度得点が減少する。

## 方 法

### 対象者と手続き

A県B大学に在籍している大学生171名を対象に個別記入式の質問紙の調査を行った。回答は無記名で行われた。質問紙への回答に1項目でも欠損があった対象者は分析から除外した。分析対象データは155名（男子45名、女子110名、平均年齢18.93歳）。

質問紙はグループ交流を行う前に、アパシー傾向（同一性の拡散障害）尺度・アパシー心理性格尺度を実施し、グループ交流（6回）が終了した後に、アパシー心理性格尺度を実施した。質問紙には携帯番号下3桁を記入させて、前後の照合を行った。

### 倫理的配慮

調査協力者には研究の主旨と調査への協力が強制でないこと、プライバシーが保護されること、回答を拒否したり中断したりすることができること、回答を中断しても不利益は生じないことを紙面に明記し、口頭でも伝えた。

### 調査項目

アパシー傾向（同一性の拡散障害）尺度：鉄島（1993）はスチューデント・アパシー傾向を「精神病の無気力とは異なり、心理的原因で主として学生の本業である学問に対して意欲の減衰を示すこと。青年期の発達課題である自我同一性の視点から同一性の拡散障害をスチューデント・アパシーの重要な発生機序としてとらえる」と定義した<sup>8)</sup>。永江（2013）は同一性の拡散障害とは、「自分とは何か」を求める事を通して自我同一性が確立する。しかし自分が何者か、何をなすべきかが分からないと、自我同一性が拡散の状態になってしまうと述べている<sup>9)</sup>。その考えのもとに鉄島（1993）が作成した「授業からの退却」「学業からの退却」「学生生活からの退却」の3因子から成る質問紙を<sup>8)</sup>、橋本（2002）が再度因子分析を行い「授業からの退却（8項目）」「学業からの退却（7項目）」「課題の取り組みからの退却（4項目）」「授業への関心からの退却（4項目）」の4因子を抽出したものを使用した<sup>10)</sup>。

アパシー心理性格尺度：下山（1997）が作成した、スチューデント・アパシー特有の心理障害を測定する尺度である。生活リズムの乱れや時間感覚の希薄化がみられ、生活に張りがなくなっている心理状態を示す「張りのなさ（5項目）」、確固とした自分がないために、自己の意思決定の障害が生じている自己不確実な心理状況を示す「自分のなさ（5項目）」、生活および対人関係上における活気の欠如がみられ、生活全般の実感がなくなっている心理状態を示す「実感のなさ（5項目）」、自分に敏感で、その場において常に適応的であろうと志向する完全主義的性格を示す「適応強迫（5項目）」の4つの下位尺度からなる<sup>5)</sup>。大西（2016）は大学生の無気力に関する探索的研究の中でアパシー心理性格尺度を使用しているが「適応強迫」の尺度は内的整合性が十分ではなく、他の3つの尺度との相関が比較的低かったことや概念の違いを考慮し、分析から除外している<sup>11)</sup>。しかし本研究では、強迫的要素も分析したいと考え除外しなかった。

自由記述：グループ交流6回目に行った“明日の羽根”の研修終了後に、グループのメンバーを「信

頼できると感じたか」・「まだ信頼できないと感じたか」を問う項目の選択と理由を自由に記述させた。

#### グループ交流のための内容 (全6回)

授業において同グループ (6人) で6回のグループ交流を行った。1回のグループ交流時間は90分とした。6回のグループ活動は班長をもとに実施し、班長は班員の誰もが1回行うように設定した。班長の設定は、リーダーを作ることでグループの活動の活発化を狙ったものである。

以下にグループ交流の内容について説明する。

1回目 (自己紹介) は、初めて出会った学生同士で、自己紹介をかねて「自分が飼ってみたい動物 (絵を描く)」の発表を行った。学生が初対面の相手や、話が合わない相手などとのコミュニケーションが苦手であるという特徴を考慮し、自分の描いた絵で話をする方法をとった。動物の絵はいくつか見本を提示し、絵が得意ではない学生でも見本を参考に描けるようにした。この絵を見せながら1人2分で自己紹介を行った。タイムキーパーは班長の担当とした。

2回目 (間違いさがしゲーム) は、まだグループ内に緊張があると考え、田上 (2010) が理論化し、集団援助技法として位置づけた対人関係ゲームを用いた。ゲームを楽しむことでグループの人間関係が親和的に変化する方法である。子どもたちの級友認知や感情に影響して対人行動を建設的に変容させ、循環的に集団の質的成熟が促進されるというものである。関係変容にあたり、対人緊張に対しては、身体運動反応や「楽しい」という感情により不安が逆制止され緩和される<sup>12)</sup>。この考え方から体を動かす「楽しい」グループ活動を実施した。グループにイラスト (A) を配布し、教室の後方の机にイラスト (B) を置いた。イラスト (A) とイラスト (B) には、違いが10個あり、これを2分以内に探すものであった。内容説明後に作戦タイムを設け、班長を中心に話し合いをさせた。イラスト (A) は班の机に固定し、班員が順番にイラスト (B) を走って見に行くものであった。

3回目 (タイムマシーンにのって) 班員同士が仲良くなったところで、将来の自分についてイメージを語るものであった。シートを用意し、自分の10年後のイメージを具体的に記入し、班で発表した。シートを書く前に、班で発表することを伝え心構えをさせた。シート内容は、どこの場所でどんな仕事をし、家族構成などを具体的に書けるように工夫を行った。このシートを見せながら1人2分で将来の自分を語った。タイムキーパーは班長にゆだねた。

4回目 (紙バック作成) 人にはそれぞれ個性があり、同じ新聞紙で同じような指示のもとバックを作っても全く同様なバックにならないことから、個性の理解と自分の考えかた (認知) の変容を目指した。

5回目 (私の石物語) 下山 (1997) は面接の中で絵物語法を行っている。物語を創り語ることで、聴き手との信頼関係が深まり「日常的対象関係」に働きかけができると述べている<sup>5)</sup>。そこで学生に物語を創作させた。題材は「石」で、参加者に石を配布して自分の思うままに物語を書くように指示し (石が主人公・自分が主人公で石を拾ったなど)、石物語は班の中で発表することを伝え心構えをさせた。30分で物語を創り、その後班で発表を行った。

6回目 (まとめ・明日の羽根) グループ交流をした1回目から5回目までを振り返り、どんな交流をしたのか思い出してもらった。A4の白紙を6枚にカットして、その紙に羽根の絵を描き、グ

グループ交流をした仲間の名前を書き、交流の中で印象に残ったことをコメントに書くように指示をした。1人がグループの仲間5人分のコメントを書くことになる。1人分のコメント記入時間を3分とした。全員分書き終わった後で、羽根のコメントを班員でそれぞれ交換した。自分宛かどうか名前を確認して5人からのコメント内容を読んでもらった。

## 結 果

### 記述統計量と信頼係数

#### アパシー傾向（同一性の拡散障害）尺度

鉄島（1993）に従い、第1因子を「授業からの退却」、第2因子を「学業からの退却」、第3因子を「課題の取り組みからの退却」、第4因子を「授業への関心からの退却」とした。各因子の $\alpha$ 係数を算出したところ、授業からの退却が.880、学業からの退却.699、課題の取り組みからの退却が.663、授業への関心からの退却.634、であり、ある程度の信頼性があることが明らかになった（表1）。

表1 アパシー傾向（同一性の拡散障害）尺度の項目および記述統計（n = 155）

項目内容	平均値	標準偏差
<b>&lt;授業からの退却 (<math>\alpha=.880</math>)&gt;</b>		
1 重要な授業にも、つい出る気がなくなって欠席してしまうことがあった	2.16	1.090
5 出席が重視される授業でさえも休みがちである	1.79	1.005
9 なんとなく授業をさぼることがある	2.34	1.159
13 生活リズムが一定しないために、午前中の授業は欠席しがちである	1.94	1.073
16 学校にいても、つい授業にでるのが面倒臭くなって欠席してしまうことがある	1.63	.961
18 朝寝坊などで授業に遅れることが多い	2.14	1.190
20 授業は何よりもまず第一に優先している	3.50	1.125
22 特別な理由がないのに重要な試験を受けなかったことがある	1.18	.669
<b>&lt;学業からの退却 (<math>\alpha=.699</math>)&gt;</b>		
2 教師に言われなくても自分から進んで勉強する	2.95	.945
6 勉強で疑問の思う時はすぐに調べる	3.24	.919
10 授業で疑問に感じられる箇所があれば積極的に教師に質問に行く	2.23	.944
14 授業で取り上げられた参考書には目を通すほうである	2.68	1.000
17 授業は積極的に参加するよりも、いつもただ座っているだけだという感じだ	3.03	1.000
19 勉強に関する本をよんでいてもすぐに飽きてしまう	2.94	.965
21 時間を忘れて勉強することがある	2.33	.947
<b>&lt;課題の取り組みからの退却 (<math>\alpha=.663</math>)&gt;</b>		
3 ひとつの課題に打ち込むことができない	2.57	.939
7 注意を集中するのは他の人より苦労する	2.52	.900
11 自分の興味のある事柄でさえ、あまりエネルギーをそそぐ気がしない	2.01	.953
23 学校での勉強もアルバイト活動などもあまりやる気が起こらない	2.58	1.044
<b>&lt;授業への関心からの退却 (<math>\alpha=.634</math>)&gt;</b>		
4 授業中に携帯でLineを送ったり、ゲームをする	2.97	1.122
8 授業に出席するよりは自分の好きなことをやっている方がいいと思う	2.66	1.119
12 「早く授業が終わればいい」としばしば思う	3.78	.899
15 出来栄が納得いかなくても、レポートは提出できさえすればよいと思う	2.83	.979

## アパシー心理性格尺度

下山 (1997) に従い、「張りのなさ (5項目)」、「自分のなさ (5項目)」、「実感のなさ (5項目)」、「適応強迫 (5項目)」の4因子とした。各因子の $\alpha$ 係数を算出したところ、張りのなさ .759、自分のなさ .757、実感のなさ .709、適応強迫 .578、であり、ある程度の信頼性があることが明らかになった (表2)。

表2 アパシー心理性格尺度の項目および記述統計 (n = 155)

項目内容	実施前		実施後	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
<b>&lt;張りのなさ(<math>\alpha=.759</math>)&gt;</b>				
3 よく眠れて朝はそう快な気分で起きられる*	3.44	1.052	3.25	1.079
6 朝起きて夜眠る生活リズムが乱れている	3.34	1.281	3.25	1.296
9 時間がただ過ぎていくという感じがある。	3.57	1.099	3.26	1.196
11 毎日をなんとなく無駄に過ごしている	3.27	1.113	2.98	1.198
14 いつも頭がぼんやりしている	2.75	1.215	2.63	1.185
<b>&lt;自分のなさ(<math>\alpha=.757</math>)&gt;</b>				
7 自分がほんとうに何をやりたいのか分からない	3.31	1.297	2.97	1.253
12 なんとなく大学まで来てしまったという感じがある	2.86	1.405	2.73	1.374
15 一度決めたことでも人から言われると決心が変わりやすい	2.94	1.226	2.91	1.170
17 自分の将来といっても現実感がない	3.38	1.224	3.25	1.175
18 自分のしていることに自信がない	3.33	1.111	3.17	1.180
<b>&lt;実感のなさ(<math>\alpha=.709</math>)&gt;</b>				
1 自分の悩みを何でも話せる友人がいる*	2.04	1.116	1.98	1.054
4 自分の人生を生きている実感がない	2.38	1.197	2.32	1.134
13 何事も生き生き感じられない	2.48	1.175	2.38	1.124
16 人に対して自分の意見や考え方はっきり主張する*	2.94	1.040	2.81	1.045
20 心から楽しいと感じる時がある*	1.74	.796	1.71	.806
<b>&lt;適応強迫(<math>\alpha=.578</math>)&gt;</b>				
2 きちんとしていないと気が済まない	3.33	.947	3.35	.952
5 自分が何かをしたいよりも何が自分に期待されているのかを優先する	2.63	1.007	2.70	.988
8 自分の弱みを人に知られたくない	3.45	1.223	3.29	1.279
10 勝ち負けにこだわる	3.31	1.079	3.10	1.191
19 人からの評判がとても気になる	3.55	1.100	3.50	1.175

注)\*は逆転項目を示す。

## アパシー性格尺度得点のグループ交流 (6回) の前後の検討

アパシー性格尺度得点における6回のグループ交流の前後を対応のあるt検定を行った。その結果「張りのなさ」、「自分のなさ」、「実感のなさ」の前後の得点が1%水準で有意にグループ交流後に減少していた。「適応強迫」は5%水準で有意にグループ交流後に減少していた (表3)。

## アパシー性格尺度得点がグループ交流で変化しない学生は、アパシー傾向 (同一性の拡散) 尺度の得点との関連

アパシー性格尺度の「張りのなさ」「自分のなさ」「実感のなさ」「適応強迫」の各因子について、グループ交流の前後の変化得点を算出した。得点は実施前から実施後を引き、その度数分布からマ

表3 アパシー心理性格尺度の実施前後の t 検定 (n = 155)

	実施前	実施後	t値
張りのなさ	13.04 (3.41)	12.12 (3.61)	5.95 **
自分のなさ	15.82 (4.47)	15.03 (4.51)	4.21 **
実感のなさ	11.58 (3.65)	11.2 (3.50)	2.96 **
適応強迫	16.27 (3.28)	15.95 (3.40)	2.34 *

\*\* p<.01 \* p<.05

イナス変化・変化なし・プラス変化の3群を設定し、この3群を独立変数とし、アパシー傾向（同一性の拡散）尺度の「授業からの退却」「学業からの退却」「課題の取り組みからの退却」「授業への関心からの退却」を従属変数として分散分析を行った。しかしどの群においても、有意な差は見られなかった。

グループ交流でメンバーを「信頼できると感じる」と回答した学生は、グループ交流の前後でアパシー性格尺度得点が減少する

グループ交流の最後の“明日の羽根”終了後に、このグループについて「信頼できると感じたか」「まだ信頼できないと感じたか」の回答を選択させた。その結果、信頼できると感じた学生は91名(58.7%)。まだ信頼できないと感じた学生は64名(41.3%)であった。信頼に関わる項目を独立変数として、アパシー性格尺度の「張りのなさ」「自分のなさ」「実感のなさ」「適応強迫」の各因子についてグループ交流の前後の変化得点の差を従属変数として、t検定を行った。その結果、グループを信頼できると感じた学生は「張りのなさ」、「自分のなさ」、「実感のなさ」のグループ交流前後の差がグループを信頼できないと感じた学生より、1%水準で有意に減少していた。グループを信頼できると感じた学生の「適応強迫」はグループ交流前後の差がグループを信頼できないと感じた学生より5%水準で有意に減少していた(表4)。

表4 信頼とアパシー心理性格尺度の実施前後差の t 検定 (n = 155)

	信頼した(n=91)	信頼できない(n=64)	t値
前後張りのなさ	1.29 (2.18)	.39 (1.30)	2.93 **
前後自分のなさ	1.48 (2.58)	-.20 (1.43)	4.74 **
前後実感のなさ	.67 (1.04)	-.02 (1.08)	2.63 **
前後適応強迫	.56 (1.88)	-.02 (1.40)	2.08 *

\*\* p<.01 \* p<.05

## 考 察

スチューデント・アパシー傾向の学生をどのように援助したらいいのか、その技法を開発したいと考えた。スチューデント・アパシーの援助方法である下山(1997)の「つなぎモデル」支援に着目して<sup>5)</sup>、仲間同士をつなげるために、信頼が深まる交流の支援技法の開発を試みた。

①アパシー性格尺度得点は、グループ交流（6回）の実施前より実施後の得点が減少する

アパシー性格尺度得点における6回のグループ交流の前後を対応のあるt検定を行ったところ、「張りのなさ」、「自分のなさ」、「実感のなさ」、「適応強迫」、すべてで、グループ交流前より交流後の得点が低下していた。アパシー性格尺度は点数が高いほどその気持ちが強いことになる。「自分がほんとうに何をやりたいのか分からない」と強く思っていると得点が高くなるので、グループ交流後に低下したということは、自分のやりたいことが少し見えてきたのかもしれない。グループ交流では、友だちとの交流の緊張を取り除こうと考えた。田上（2010）は、ゲームを楽しむことでグループの人間関係が親和的に変化し、認知や感情に影響をあたえ、循環的に集団の質的成熟が促進されるという。関係変容にあたり、対人緊張に対しては、身体運動反応や「楽しい」という感情により不安が逆制止され緩和される<sup>12)</sup>。今回のグループ交流では、最初の2回は楽しさを重視し、また少し走る運動を取り入れた。3回目には進路・将来展望について、具体的に語りあった。学生はグループの中で、真剣に将来を考えコツコツと計画をたてている他者を見て刺激を受け、将来展望のない他者を見て少し安心をしたようである。進路や将来について正解はなく、自分らしさや自分なりに今できることを考えたようである。そのことが「張りのなさ」「自分のなさ」「実感のなさ」の得点低下に影響をあたえたと推測される。

②アパシー性格尺度得点がグループ交流で変化しない学生は、アパシー傾向（同一性の拡散）尺度の得点が高い

今回のグループ交流前後で全く得点の変化がなかった学生がいる。アパシー性格得点の前後の変化が0である。この学生たちは、自我同一性が拡散しているのではないかと考えた。しかし、アパシー傾向（同一性拡散）尺度において、マイナス変化・変化なし・プラス変化での違いは見られなかった。このことは次の課題と考えられる。

③グループ交流でメンバーを「信頼できると感じる」と回答した学生は、グループ交流の前後でアパシー性格尺度得点が減少する

6回のグループ交流を実施したが、信頼することができると答えた学生は、「張りのなさ」、「自分のなさ」、「実感のなさ」のグループ交流前後の差が1%水準で有意に減少していた。「適応強迫」は5%水準で有意にグループ交流前後の差が減少していた。下山（1997）は支援方法として「つなぎモデル」を開発したが、スチューデント・アパシーは、当事者が悩まないことで周囲が悩まされ批判的に反応することで、ますます当事者が悩まない状況となる悪循環の経路が形成されると述べている<sup>5)</sup>。アパシーの学生に親や教員がつなぎの役になるのは、当事者が悩まない状況の中で困難である。そこで、本研究は学生がつなぎ役になれないかを検討した。グループ交流が6回だったこともあり、信頼できると答えた学生が6割だったことは残念であった。しかし、今回のグループ活動で友だちを信頼できた学生は、友だちが「つなぎ」になり、アパシー傾向の考えが減少した。

本研究において「つなぎ」になる支援技法のグループ活動の6つが明らかになったと考えられる。今後は、6つのグループ活動の組み合わせや、現在6割であった信頼をさらに深めるためのグループ活動を研究する必要があると考えられる。



## 引用文献

- 1) 文部科学省. (2021). 学校基本調査 - 2021年度 (確定値) 結果の概要 文部科学省.
- 2) 田中 存・菅 千索. (2007). 大学生活不安に関する心理学からのアプローチ 和歌山大学教育学部紀要, 教育科学 pp.15-22.
- 3) Walters, P. A. J. (1961). Student Apathy Blaine B. Jr. & McArthur C. C. (ed) Emotional problem of the student. Appleton-Century-Crofts.
- 4) 笠原 嘉. (1978). 退却神経症 withdrawal neurosis という新カテゴリーの提唱. 中井久夫・山中康裕 (編) 思春期の精神病理と治療. 岩崎学術出版社
- 5) 下山晴彦. (1997). 臨床心理学研究の理論と実際 - スチューデント・アパシー研究を例として - 東京大学出版会
- 6) 青木健次. (1989). スチューデント・アパシー, 境界例, 家族療法的視点 石川 元 (編) 境界例 金剛出版 pp.124-148.
- 7) 松原達哉. (1990). スチューデント・アパシーへの対応 - 生活分析的アプローチ - 土川隆史 (編) スチューデント・アパシー 同朋舎 pp.215-233.
- 8) 鉄島清毅. (1993). 大学生のアパシー傾向に関する研究 - 関連する諸要因の検討 - 教育心理学研究41, 200-208.
- 9) 永江誠司. (編) (2013). キーワード 教育心理学 北大路書房 pp.44-45.
- 10) 橋本泰子. (2002). 心理学的アセスメントによるアパシー傾向の一考察 『人間科学研究』文教大学人間科学部24 53-66.
- 11) 大西恭子. (2016). 学業領域固有の知覚された無気力の探索的研究 教育心理学研究64, 340-351.
- 12) 田上不二夫. (編) (2010). 実践グループカウンセリング 金子書房

